

第5回水害サミットの開催について
The 5th round of Mayor,s summit on the flood disasters

—被災地からの情報発信—
-Send out signals of information from disaster areas -

水害サミット実行委員会事務局
The Flood Damage Summit Executive Committee Office

1. はじめに

水害サミットは、全国の水害被災地の市区町村長が一堂に会して被災時の体験や反省、防災への提言などについて率直な意見を交換するための場として設けられました。

このサミットは、①水害経験を通じて得た知見や課題について意見交換を行い、課題の解決に向けた取り組みを強化していくこと、②水害経験の少ない他の市区町村長に情報発信することで、広範な防災・減災意識を高めていくこと、③水害の防災・減災に向けた、河川行政・河川管理への意見・提案を行っていくことを目的として、平成17年9月から毎年開催され、第5回水害サミットは、平成21年6月2日に開催されました。

2. 第5回水害サミットの概要

(1) 対象とする市区町村

平成14年から平成20年において激甚な水害を被った市区町村、及び河川激甚対策特別緊急事業または河川災害復旧助成事業を実施している市区町村

64市区町村

(2) 主 催

・水害サミット実行委員会

水害サミット実行委員会発起人会

新潟県三条市長、新潟県見附市長、福井県福井市長、兵庫県豊岡市長

・毎日新聞社

(3) 日 時

・平成21年6月2日（火） 15：00～18：00

(4) 場 所

・国土交通省共用会議室2A・B（東京都千代田区霞が関）

(5) 出席者

当日は、全国から17市町村長の出席がありました。また、全国の情報提供と治水対策の議論に加わっていただくため、オブザーバーとして国土交通省河川局長の参加をいただきました。

第5回水害サミット参加者（敬称略）

コーディネーター 松田 喬 和

オブザーバー	甲村謙友
北海道日高町長	三輪茂
岩手県一関市長	浅井東兵衛
秋田県北秋田市長	津谷永光
新潟県三条市長	國定勇人
新潟県見附市長	久住時男
福井県越前市長	奈良俊幸
長野県箕輪町長	平澤豊満
岐阜県高山市長	土野守
静岡県伊豆の国市長	望月良和
愛知県岡崎市長	柴田紘一
三重県伊勢市長	森下隆生
京都府福知山市長	松山正治
兵庫県豊岡市長	中貝宗治
兵庫県西脇市長	來住壽一
高知県いの町長	塩田始
熊本県球磨村長	柳詰恒雄
鹿児島県湧水町長	米満重満

市町村長以外の参加自治体

新潟県長岡市、福井県福井市、福岡県飯塚市

(6) 会議結果

会議は、毎日新聞社の松田喬和論説室専門編集委員にコーディネーター役をお願いし、今回は「都市型水害（ゲリラ豪雨）への対応と河川との共生」をテーマとしました。

① 都市型水害（ゲリラ豪雨）への対応

昨年8月の集中豪雨で、1,110棟が床上浸水し、2人の死者が出た愛知県岡崎市の柴田紘一市長から事例紹介として、深夜に1時間あたり146.5mmもの豪雨で、ゲリラ豪雨と報道されたその災害の被災状況と対策が報告されました。

この事例紹介を受け、各首長から自分の経験と、岡崎市の事例を元にした意見等が発表され、その後青山河川局治水課長から、国土交通省も研究を進めている「中小河川における局地的豪雨対策WGの概要」が情報提供されました。

以下、議論の概要を紹介します。

（岡崎市の事例紹介）

- ・ 深夜、しかも豪雨の中での避難勧告は困難をきわめ、特に情報伝達のあり方については、多くの課題が顕在化した災害であった。人の判断という過程を経ての勧告等では対応に限界があった。

講じている対策等

【水位計・浸水計と連動した瞬時警報装置】

【コミュニティーFM局と連動した防災ラジオの配備】

【携帯電話によるエリアメールの活用】

【情報収集ツール（災害フォトシステム）の採用】

（参加市町村長意見）

- ・ 国、県道等幹線道路の通行止めは、他の道路管理者との連携が重要。県道、市町村道への迂回は、より危険が伴う恐れがある。
- ・ 市街地の水路改修等市単独事業による排水対策が課題となっている。
- ・ 避難判断・伝達マニュアルを作成し、ホームページで公開している。
- ・ 河川災害復旧助成事業では、国の支援計画期間が5年であるのに、隣接市である下流の地権者交渉が難航した結果、上流部の本市の部分が入らないところで終わってしまう不合理が起きている。
- ・ 3カ国語（日本語・ポルトガル語・韓国語）の防災パンフレットを作成した。
- ・ 地域FMを通じて地震情報と併せてJ-ALERTの対応を取り、受信用ラジオを公共施設400箇所に配備。市民への普及には、助成制度を採用。
- ・ 内水対策として、排水機場の整備だけでなく、それぞれの河川にかなり大きな面積（田）で水を貯める施設（溜池）を計画している。常時ポンプを稼働し、平常時は運動施設として利用する。こうした（田）の利用方法も省を超えた連携で理解がいただきたい。
- ・ 河川として上流の状況をどう把握するかが非常に重要で、90km上流ですごい集中豪雨が降ったが、下流ではほとんど降っていないにも関わらず大水害が起こった。上流で降った雨が下流にどう影響が出るかという情報が全く使えなかった。
- ・ 昨年、要援護者などの自主避難を地域で行ったことで、人的被害が未然に防がれた事例があり、日頃の訓練等の必要性を痛切に感じた。
- ・ 地域に要援護者の支援体制を要請する中で、具体的にこの人にはこういう方々があたるというようなシステムがどんどん進んでいる。
- ・ 激特事業は進んだが、内水対策はどうするかが課題となり、市街地よりも北側にある丘陵地の市街地については、その水は幹線排水路には乗せないということで、道路の下にパラペットを入れ、直接一級河川に合流するシステムを作った。
- ・ 市民の自助なり共助なりが非常に大事なことも事実であるが、市である程度のハード事業は整備していかないと市としての責任が果たせないと考え、市としてやるべきこと、市民にお願いすべきことというのは、きちんと努力してきた。
- ・ 特異な例だが、一級河川に放水路もできたが、雨水、都市下水を独自に引いている。上流が浸かっても少し下流で都市下水の引きのよいところは浸からない。ただ本川が一定水位に達したら、都市下水を止める。止めたら下も浸かる。上流も浸かるけど下も浸かるということを理解していただく。そのためにも盛土規制をやっている。
- ・ 治水対策は川の流域全体を考えた対策でなければならない。上流域で河床

掘削とか堤防の補強があれば、下流域は少なくとも水勢が変わる。水の流れが速くなる。マイナス面を十分注意する必要がある。

- ・ 上流の自治体からの情報は非常に重要だが、県境を越える情報が入りにくい。国土交通省との緊密な連絡が非常に役立った。
- ・ 土地改良区が管理している排水路、排水機場も水という意味では河川と一緒にあり、「同じ水の問題なのだから、一緒になって、より考えていこう」という、次のアクションを起こすべきタイミングに来ていると感じた。

(青山治水課長からの情報提供)

今年のゲリラ豪雨では、今までと随分違う被災結果が生じた。そこで色々な課題について検討した。

- ・ 降っている雨を見ていたのでは、もう遅いということもある。最近では、xバンドレーダーという積乱雲の発達途上の状態を押さえることのできるレーダーもある。このようなレーダーを整備することで、大雨になりそうな予兆をつかみ、できるだけ手前で情報を仕入れないと時間的に間に合わない。ある程度先を見るルールやシステムの開発が必要。
- ・ 「防災情報の共有」、「防災意識の向上」、「地域防災力の維持・向上」こういったことが非常に重要。出前講座などで、学校での教育関係について情報発信している。今後も市町村との情報ネットワーク強化を図っていく。ハザードマップもより発展系を。「まるごとまちごとハザードマップ」で電柱に様々な記しをつけているが、いろいろ工夫しながらこれからも実施していこうと考えている。

今年のゲリラ豪雨では、河川から水が溢れる前に、道路そのものが水路になってしまう状態で、「避難」という一言で「行け」といっても、逆に、避難の際に危険も生じかねないため、どう考えていくのかがこれからの課題。今後とも勉強を続け、また情報の共有化を一緒にしていきたいと考えている。

② 「河川との共生」

河川の災害を防ぐための施策と自然環境の維持、住民の河川への親しみの施策をどう両立させていくか。

豊岡市の中貝宗治市長から「人と円山川との共生」と題して、円山川緊急治水対策におけるコウノトリも住める湿地再生について、事例紹介いただき、それに基づき意見交換を行った。

以下、議論の概要を紹介します。

(豊岡市の事例紹介)

- ・ 円山川には、ひのそ島と呼ばれる中州が約16ヘクタールあり、水の流れを阻害しているため、掘削の要望をずっとしてきた。他方で、ここはいろいろな生き物の棲みかになっているため、両方をとり半分だけ掘削をした。掘削した結果、コウノトリはちゃんと降り立って、餌場として使うようになっている。
- ・ 円山川の支流の出石川には堤外水田が約15ヘクタールあり、毎日のようにコウノトリが来ている。ここを湿地再生するということで、用地買収は、国交省で対応いただいている。掘り下げて湿地再生をし、これも治水対策と湿地再

生。そうしたことが進められており、すぐ近くで今、コウノトリがヒナを一所懸命育てている。

- ・ 円山川は、豊岡の町のど真ん中を流れている。このすぐ上の堤防上では自動車通っている所だが、絶妙な深さに掘削されており、15羽のコウノトリが降り立ち、そして飛び立っている。

(参加市町村意見)

- ・ 喫緊の課題である河川改修事業は一通り山を迎えた。牙を剥く瞬間の川は、365日のうち1日か2日であるため、本来は融和していく川との付き合い方をどうしていくかが、非常に難しいと感じている。

県管理の河川に、今年4月、ポット苗を民間企業からもらい、地域住民400人くらいで、シバザクラを植えたが、維持管理にも参加してもらおうという一つの見える形にしている。ソフト事業は、写真やイベントなどの形で絶えず市民に話題を喚起するような取り組みをし、どこかに楽しさを提供したり、褒められるような話題づくりを行政が手伝い仕掛けていくことが、これから先、川と上手に付き合っていくにはとても大切と感じた。

- ・ 「川に学ぶ体験活動協議会(RAC)」というNPO法人があり、9年目になる。その中で、川の指導者育成をずっと図っており、いま、全国で2922名が登録人材が育っている。近くのリーダーもホームページで見れば登録されていると思うので、そういう皆さんと学校の先生とかをもっと接触させるような形になればと思う。
- ・ 竹と土佐和紙でキャンドルをつくり、それを川原に3千も4千も並べるイベントを、去年初めて12月に実施した。その竹は炭にして学校へ持って行き、子どもが河川の浄化の勉強をし、その炭をあげた分を農地に戻し土壌改良にするという流れで県の補助金、つまり国の補助金がいただけるならいただきたいと思っている。
- ・ 激特の事業ですごい堤防が出来上がったのだが、地域との懇談の中で、そこを桜並木に、との意見があった。ところが、斜面の堤防には植えられないので、県と話し合い、河川側ではないほうに、地元の人たちが自ら植えて1キロの堤防が出来上がった。それにあわせて、県の河川管理エリア内に、川に親しむような、ベンチや東屋をつくった。今回の災害でそういうのができた。
- ・ 川と人との触れ合い、「かわまちづくり事業」を採択いただいた。球磨川と、その横を江戸時代から人吉街道といわれた道である県道が走っているが、人とのふれあい空間をつくるというコンセプトで計画を進めている。川との資源的な、人との触れ合い空間としての付き合い方はこれからも大事だと思っている。
その大事な川がときどき暴れ川となり、人の命を脅かす。「川との共生」は、言葉としてはいいが、実際、現実にはその地域の防災、住民の命、そういうものを守る責任者としては非常に悩むことがある。村長になって7年のうち5回水害を受けている。正直行ってきれい事だけではいけない。去年から参加しているが、川との共生ということのヒントをいただければと思っている。いずれにしても、どのような共生をするべきか、というのは一つのテーマとして取

り組んでいきたい。

- ・ いま、狩野川の堤防に100キロサイクリングロードをつくっていただき、天端部分を使っている。すぐその下側をサイクリングロードで整備している所もあるが、これをもう少し進めていただけるとありがたい。やはり健康志向というのがかなり出てきているので、狩野川を中心にした川を使った健康づくりをやっていききたいと思っている。
- ・ 堤防そのものを御神体として堤防神社が建てられており、毎年8月には、堤防の愛護と感謝の気持ちをあらわした堤防祭りがある。秋には、福知山マラソン、別名「1万人マラソン」といい、全国から参加があるが、大会前日には、堤防や川の草刈り、掃除、終わりに愛護会がゴミ拾いをして堤防を守っている。
- ・ 台風23号のときに、富山湾へ流木がたくさん流れて、漁業関係者にずいぶん被害を与えたことから、富山湾の漁業関係者との交流がある。一方、漁業関係者も、植栽のために出てきて、こちらからは向こうの清掃を手伝うなど川を仲介した交流が行われている。

* 甲村河川局長コメント

川は洪水防御や利水、環境だけではなくて、地域の文化や癒やしだとか広い機能を持っている。河川管理の究極の目的は、総合的な効用を最大化していくことだ。それが川との共生であると考えている。地域の方や専門家の意見を聞きながら実施していきたい。ゲリラ豪雨などの都市型水害に対しては、川だけでなく、降った雨をどう処理して被害を起こさないようにするかを考え、現地に即して工夫しながら行っていきたい。

3. おわりに

水害サミットも5回目となり、今回、新たに岡崎市から参加がありました。

水害を経験した自治体として、その被災地責任をどのように果たしていくか。

平成19年6月には実行委員会が水害に被災した自治体にアンケートを実施し、現場での水害対策の苦勞や失敗、対応策等を取りまとめた「水害現場でできたこと、できなかったこと 被災地からおくる防災・減災・復旧ノウハウ（発行：ぎょうせい 編集：水害サミット実行委員会事務局）」を発行し、被災地からの情報発信を行いました。

平成21年1月には、そのノウハウ集を基に、被災体験地の新たなノウハウを追加し、国土交通省河川局の全面的なご支援を得て「被災地からの防災・減災・復旧ノウハウ 水害サミットからの発信」として、ホームページを立ち上げました。

本日の会議でも、ゲリラ豪雨への対策として、水位計・浸水計と連動した瞬時警報装置による伝達手段が紹介されており、この際、改めて被災自治体に新しいノウハウ等を照会したうえで、ホームページを最新のものに更新する等の提案をいただき、取り組むこととなりました。被災自治体におかれましては、ご協力をよろしくお願いいたします。

おわりに、第5回水害サミットの開催にあたり、ご多忙の中にも関わりませず、全国の情報提供と適切な助言等をいただきました国土交通省河川局治水課の皆様には厚く御礼申し上げます。

<水害サミット対象市区町村>

平成14年から20年において激甚な水害を被った市区町村、及び河川激甚災害対策特別事業または河川災害復旧助成事業を実施している市区町村は次のとおり。

(合併後の市区町村名を記載)

北海道 日高町 新冠町
岩手県 一関市
秋田県 北秋田市
東京都 中野区 杉並区
神奈川県 横浜市
新潟県 長岡市 三条市 見附市
石川県 金沢市
福井県 福井市 鯖江市 越前市
長野県 岡谷市 諏訪市 伊那市 下諏訪町 辰野町 箕輪町 南箕輪村
岐阜県 高山市 飛騨市
静岡県 静岡市 伊豆の国市
愛知県 名古屋市 岡崎市
三重県 伊勢市 紀北町
京都府 福知山市 舞鶴市 宮津市 与謝野町
兵庫県 洲本市 豊岡市 西脇市
山口県 岩国市
徳島県 徳島市 小松島市
香川県 高松市 さぬき市 東かがわ市
愛媛県 新居浜市 西条市 大洲市
高知県 いの町
福岡県 福岡市 飯塚市 大野城市 太宰府市 宇美町 志免町
熊本県 球磨村
宮崎県 宮崎市 延岡市 西都市 えびの市 国富町 日之影町
鹿児島県 出水市 伊佐市 薩摩川内市 さつま町 湧水町